

山形市の環境に関する意見交換会 ～ 10年後の山形市の環境を考える～

1 意見交換会の目的

次期山形市環境基本計画（以下「次期計画」という。）の策定にあたり、市民・事業者・関係団体等の多様なご意見を幅広く聴取し、次期計画へ施策の方向性や環境課題の解決等に向けた施策へ活かしていくことを目的とする。

2 意見交換会の概要

地域の自治組織、農林業関係者、環境関係団体、市民活動団体、事業者団体の代表者及び画学生、教職員、学識経験者より参加いただき、事前アンケートにより挙げられた「暮らし続けたい将来の山形市の環境」をテーマに「その実現のために、今できること、必要なこと」などについてグループワーク形式で意見交換を行った。

(1) 日時 令和2年8月4日（火）午後6時30分～午後8時30分

(2) 場所 山形市役所11階 大会議室

(3) 参加人数 12名

	自治組織 関係団体	農林関係 団体	環境関係 団体	市民活動 団体	事業者関 係団体	学生	教職員	学識者
人数	2名	2名	1名	1名	2名	1名	1名	2名

3 内容

(1) グループワークの実施方法について

はじめに山形市環境基本計画の目的と位置づけや、現在検討中である「計画の対象」、「基本理念」、「めざす将来の環境像」、「めざす将来の環境像を達成するための基本目標」を紹介し、意見交換会の趣旨について理解を深めていただいた。

次に、グループワークの実施方法について、事前アンケートの結果を次期計画の基本目標に関連する内容に分類し、2つのグループにより違ったテーマで意見交換を行い、グループワークの後半には、グループ内3名より他グループに移動し、多様な視点での意見交換を行うことについて説明した。

この他、各グループには、環境課職員、関連する課の職員を配置し、進行は、学識経験者のファシリテーターより進行いただいた。

● Aグループテーマ

区分	テーマ「暮らし続けたい将来の山形市の環境」
自然との共生	森林や里山が整備され、自然豊かで野生動物と人間の安全な共生が図られたまち
生活環境の保全	・水と空気がおいしいまち ・美しいまち

●Bグループテーマ

区分	テーマ「暮らし続けたい将来の山形市の環境」
低炭素社会の推進	・農作物やエネルギーの地産地消が盛んにおこなわれ、若者が生き生きと活動できる低炭素なまち ・自動車に頼らず徒歩や自転車で暮らしやすい環境
循環型社会の推進	・3R（5R）の推進によるごみ減量できれいなまち ・「もったいない」を合言葉に食品ロスの少ないまち

(2) グループワークでの意見交換

①Aグループ

〔テーマ〕 森林や里山が整備され、自然豊かで野生動物と人間の安全な共生が図られたまち

●森林所有者の山離れが進む中で、昨年度より森林経営管理制度が始まり、荒廃森林の整備や環境、明確化されることが望まれる。そのほかに、山に関心を持ってもらえれば不法投棄、伐採、盗伐などを防げるのではないかと。景観が保たれます。また整備が進めば二酸化炭素の削減、間伐材のバイオマス利用、土砂流出の防止など様々な環境問題に寄与されると考えている。



- 林業の人気のないことで、土砂災害や生態環境にも影響が出てきているため、木質バイオマスなどのエネルギー事業とセットで考えていくと、もっと林業、里山環境の活性化とかにつながっていくのではないかと。
- 野生生物と共存するためには花見山とかその辺の環境整備、外見管理、自然が見えるような里山づくりの活性化が必要である。
- 市内でも限界集落の問題出てきている。経済面だけで解決しようとせず環境面からやっつけていかないと成り立たないと思う。また、今生活している環境がいかに素晴らしいかを啓蒙する必要だが、都市部と山の中の生活は全く異なるため、それを縮めることや、公共交通機関の改善が課題である。
- 子供たちに街に残ってもらうには、小さい時に里山で遊んでもらって、好きになってもらえる機会があるとよい。例えば、里山整備のボランティアに子供達も参加してもらい、だんだんきれいになっていくのを実感するのもよいと思う。
- 3年ぐらい前から実施隊が組織され、かなり有効に動いており、いい方向に向かっていると思う。耕作放棄地についてはいろいろ意見があるが、使用しない農地、田畑は自然に返そうという意見もある。
- 野生動物と共生するには山をきれいにする必要があるが、農家も高齢化でやめる人が増え、たとえば柿の木をそのままにしておくとかマがくる。
- クマやイノシシを間引くことが必要である。他の市町村では料理として活用している。

〔テーマ〕 美しいまち

- 中心市街地の景観等については、中心市街地活性化法により指定区域内は補助援助があるが、それ以外の地域の商店街についても補助援助があればもっと活性化する。
- カラスや猫によるごみの散乱防止が必要である。猫の去勢の補助金もあるが拡充してやってもらいたい。
- 通学路にごみが溜まっている場所があって、子供たちが通るわきにカラスが飛んでいることがある。
- 集積所がきちんとされてないところがあるところ目立つが、町内会のやり方によって違う。コミュニケーションが取れている町内会はきれいである。
- 国交省で道路活用について緩和したということがあり、中心市街地にちょっと休めるベンチとか置いた空間を整備してはどうか。
- 雪国では移動の問題がある。雪が降ると車が便利だが、低炭素とか考えると無散水消雪の自転車道の整備をしたらどうか。
- 年配の方と子供さんが町に来て楽しいと思う場所や緑のある場所を作ってもらえたらどうか。
- 計画策定の中で、言葉だけでなく地図に落とししていくことで、イメージができる。具体的な絵を示していくことが山形市民に伝わるのではないか。

〔テーマ〕 水と空気がおいしいまち

- 高瀬地区は平成16年ごろ国の中山間事業で上下水全世帯完備になった。それからハエとか蚊がいなくなった。

②Bグループ

〔テーマ〕 農作物やエネルギーの地産地消が盛んにおこなわれ、若者が生き生きと活動できる低炭素なまち

- スーパーなどからいろいろなものが世界中からきている。フードマイレージを考えると、山形で新鮮な食べ物が沢山あり、新鮮なものを旬のときに安く、そして運ぶ距離も短く、そういうことが山形らしく生きられることだと思う。



- 東京で働いていた時に、実家から送られたお米が圧倒的に向こうで買ったものよりもおいしいという感覚があった。おいしい食が、山形ではあたりまえにあるような感覚があるため、生産する人が地元でとれた付加価値を、もっと若い人が買いたいと思ったり、健康によいことを意識するような啓発を積極的にするような動きがあってもよいと思う。
逆に山形の地元の人とかだと、当たり前すぎて気づかない、東京の人の方が生産地などに対する意識が強いと感じる。
- 学校では、給食で地元のサクラランボを提供すると放送するので、子供たちはそれをおいしいと食べ、米粉のパンの日も喜んで食べる。触れる機会と宣伝があればもっと興味を持つのではないか。

自分で買い物をする年代の子たちに話を聞くと、実家からもらわないものを買ってしまうため、むしろそれが地産地消を妨げていることもあるのではないか。

- 学生の話では小学校までは地域の地産地消の話聞くけど、高校くらいになるとそういう話が出なくなる。そこで断絶が起きるため高校あたりでそういう話をした方がよい。
- 旬の物を旬に食べるというのは重要で、それは食べ物だけではなくて全部に共通するものだ。地元の物を認識させるための取り組みが必要なかもしれない。
- 地産地消を広げていくことによって商店街も活性化していく。
- 自分の足元をきちんと見るという習慣がなくなってきたため、どうしても遠くの方が良いと感じている。ある程度スイッチを変えることが必要であり啓蒙できる方法があればいいと思う。
- 自分で作るようになると旬だとわかる。子供たちには食べ方や、場合によっては作り方も含めて、旬というのを覚えてもらう方がよいかと思う。
- ドイツでは自分の庭で畑を始めており、世界的な傾向だと思う。山形でこれだけ畑をやっていることは誇れる文化であり、隠れた山形の文化だと思う。
- 使われなくなった畑はけっこう街中にあり、それを活かしていくとこれから良いのではないか。
- ゼロカーボンシティを宣言する自治体が増えており、市民の数を合わせると日本の人口の半分を超えている。目標が低炭素では、世の中はその先に進んでいるのにインパクトが弱すぎる。是非2050年を目標にしてゼロカーボンシティの宣言なども一緒に出してほしい。
- 車の問題やカーボンゼロの問題も、基本的に都市計画がどうなっているのか、骨子がきちんとならないとあらゆる面でそれが反映されなくなる気がする。
東京は家康が作った都市計画が今でも生きている。それを考えると、100年後200年後どういう山形市になっていくのか、山形市の都市計画をきちんと決めた上で今回の計画を決める必要がある。

[テーマ] 3R（5R）の推進によるごみ減量できれいなまち

- レジ袋に有料化が始まったが、ごみ減量・もったいないねット山形では、10数年前のスタートからマイバッグ持参運動を進め既に浸透している。一般的にはごみは行政が集めるものという認識であるが、一人ひとりがごみを減らす自覚が必要であり、こうした考え方が、会員数の増加に伴い口コミで広がっていった。
もったいないを合言葉に、3年前から食品ロスの削減にも取り組んでおり、できることを少しずつ続け、続けることで力となり定着する。環境のためにできること、そして市民としてできることに取り組んでいる。
- 海洋プラスチックの汚染やマイクロプラスチックの問題は、非常に大きい急を要するような喫緊の課題である。そのため、計画を作るのであれば、2050年を見据えた目標として、プラゴミゼロ宣言をするくらいの気構えで作ってほしい。全国的でも非常に多くの自治体の中でもプラゴミゼロ宣言を出すところが増えている。市民に分かりやすい旗を掲げることが大事なのではないか。
- これから50年後を見据えた中で若い人の教育、意識改革が必要という話もあったが、例えばスターバックスが紙のストローを使っている、それがカッコいいという形の意識

を持つようなものを民間が誘導するような政策が必要なのではないか。

- 地産地消については大変多くの皆さんから協力いただき中学校、小学校、幼稚園保育園などへ、芋ほり体験、イベントなどを通じた地産地消に取り組んでいる。
- 高瀬は山形に近い農村部ということで昔から野菜作りが盛んな地域で山形まるごと市や有志の方々が経営している産直を開いている。
紅花も同様の産業の一つと考えている。紅花に関しては小学生とのコラボや、また農業として成り立っていることで日本農業遺産にもなった。今後も紅花を活用した取組を深めていきたい。
- 高瀬は四方を山に囲まれていて、一戸あたりの所有面積も大きいんですが、実際相続となった場合に、若い方は自分の先祖代々からの農地山林にあまり興味がないかたが多い。自分のサラリーマン生活が中心で、土地に執着がなく耕作放棄地もかなり多くなっている。
- 学校がなくなったことで、みんなまちばへ行行って限界集落になった。学校が大事だとつくづく思う。学校に頼られる地域づくりを満たしていけば限界集落はなくなるのではないか。
- 全国的に人口が減っており東北6県で残るのは仙台だけだという情報もあり、その中で地区を活性化してというのは無理な話なのではないか。現在の七日町や十日町でどんどんマンションが建っているが、マンションの近くのにコンビニで買い物するな時代が来るのかなと感じている。極小零細の企業はどんどんなくなり、物販、仕入れて売だけの店が完全になくなる。技術があるところは残るかもしれないが、どんどん大手に取られてしまう。大手は、ここは限界だと思ったら完全にいなくなって廃墟になり、そこで事件や事故が起きるといことが出ている。そういう現状が今から山形にも入り込むのかなと思っている。
- 駅西の西バイパスの西側は手が付けられない、前々々市長さんが「田んぼの見えるまちづくり」という言い方をし、その時はそれでよかったのだろうが、それが足かせになって、街そのものが開発されていない状況である。西バイパスのもっと西側に第2西バイパスを作ってそこに新しい店とか新しい街づくりをしないとどんどん小さくなって消えてしまう。
- 地産地消も山形市のキャパが小さいため、頑張ってもそのくらいのものしかならない。他県に自慢できるものをいっぱい生産しているがPRが下手である。みんなわかっているがどうしたらよいか分からなくて進めない。もう少し全国に山形の物産をPRすることが必要である。
- ゴミの分別を、子供から教えていこうということで、最初かるたを作って、幼稚園、小学校に配って毎年かるた大会をやってもう10年すぎて定着した。
今年はコロナの関係で出前授業ができないため、食品ロスの紙芝居を作成して配り子供たちからもつたいないという気持ちを醸成していこうと進めている。
- プラスチックを減らしていかなければならないという今からの流れを考えると、ペットボトルが会議で普通に置かれているのに違和感がある。
商店街の話とすれば、いままでの流れは便利とかコンビニエンス、効率的というところで追いかけてここまで来た。手間がかかる、時間がかかる、でもおいしかったりそこにいるとすごく気持ちが落ち着く。コンビニエンスとか効率的とは違った場所づくりみたいなものがあるのではないか。

(3) 全体意見交換会（グループ発表後）

- 防災などの意見が出ていなかったがよいのか。

⇒ これまでの計画では防災については取り扱ってこなかったが、国土強靱化に関連し、今般の地球温暖化の影響などによる水害等に対応する河川や森林の関係部門との連携した取り組みを検討していく。



- 山寺ではサルやクマの被害で農業をやめる人が多いという話や、放置猫で困っているということも聞いているが、そのような話は出なかったのか。

⇒ 今年から地元の方と一緒に考えていく事業を立ち上げ、対策について検討している。地元の方ができることは地元で、そのうえで行政ができることはどういったことがあるかについての役割分担や継続できる仕組みなどについて検討を行っている。放置猫については、飼い猫、野良猫・放置猫が混在している状況である。動物愛護センターにおいても今年の8月から去勢手術の補助費の財源をクラウドファンディングで募る取り組みを始めている。

- 地元でできることは地元でやることは原則であるが、地元ができない現実がある一方で、そうしたことに都市部の人たちがもしかしたら興味をもったり、そこで体験できたり、都市部との交流により山形市の中で解決できることもある。もっと地域外観光・ツーリズム・交流という視点で都市部との関係性をつくり、ゴミだけでなく、食べ物、エネルギーを含めた循環型のまちづくりを目指すことが環境基本計画として大事である。

- ゼロカーボンシティを宣言した自治体は人口規模で全国の半数を超えている。是非、山形市も2050年に向けゼロカーボンシティの宣言を行ってほしい。これまで山形市はレジ袋有料化、BDFの活用など環境に関する先進的な取り組みを行ってきている。海洋プラスチックの汚染、マイクロプラスチック問題などについてもプラごみゼロ宣言する自治体も増えてきているため、市民に分かりやすい旗を掲げながら、2050年を視点としたその途中にある2030年を意識する必要がある。

⇒ 2050年の温室効果ガス削減については国・県・市とも80%の削減を目指している。市では地球温暖化対策実行計画（区域施策編）の中で数値的な積み上げを行っているが、技術革新がないと達成は難しいと考えている。環境基本計画は10年計画となるため、そのバランスを取りながら今後計画策定を進めていきたい。

- 若い世代の学生や10年後・20年後に山形市で中心的に活動する40代50代になるような世代の意見交換会を開催することで、自分たちの住む山形市をどのように考えるかについての普及啓発や意識が醸成されるものとする。

- 10年後の先の環境計画も必要であるが2100年の環境計画も実は必要である。それが問題であることを若者が気づき始めている。計画も大事だが、若者の声をどのように拾い上げ、一緒にどう行動するか場の場づくり何よりも重要である。